



●社会福祉法人尼崎あすなろ福祉会



●社会福祉法人はづき福祉会



●社会福祉法人精神障害者社会復帰促進協会

——どうやって解決へ導いたのですか？
 反対の背景には精神障がい者に対する偏見があり、行政による明確な説明が十分でなかったことも関係しているようでした。そこで、運営母体が主体となり、行政と共に確固たる信念と運営方針を持って住民に対応するようになりました。また、数百人規模の住民説明会を、最終的には10数人の地域代表者との話し合いへ形式を変えました。そうしていくうちに、住民側も「開設反対」から「開設の条件提示」へと変化していきました。

——特に大変だった点は？

住民側からの条件として、当初はフェンスの設置、通所者の車やバスによる送迎の徹底、外出時の職員の同伴等の困難な条件が提示されたことです。しかし、具体的な提示は、誤解や偏見解消の手掛かりになりました。ひとつひとつ丁寧な解決することで、前に進んだのです。

最終的には2001年、フェンスではなく緑いっぱいの公園に開かれた施設が完成しました。同年に附属池田小児童殺傷事件が起こり、施設前にパトカーが駐留警戒したり、付近に変質者が出る通所者ではないかと警察が確認に来たりすることもありました。し

かし、これも丁寧な説明することで、様々な場所と同じような事件が起こっていることへの理解に繋がりました。

——その後、地域との関係はいかがですか。

ある時、施設と公園の境となる緑の垣根に穴があき、土が踏み固められて道が出来ていることに気付きました。いつも公園で遊んでいる子ども達が入ってきていたのです。子ども達は職員が声をかけるとどんどん来るようになり、通所者と一緒に将棋やオセロ等のゲームで遊ぶようになりました。やがて子ども達が毎月開催している利用者の夕食会に参加したいと言うので、それを実現させたり、餅つき大会を開催すると、通りすがりの子連れのお母さん方が参加してくれたり、様々な交流が生まれていきました。

また、反対していた住民の方から相談を受けるようにもなりました。地域に開かれた施設であることも一つの役割とし、今後も応えていきたいと思っています。

●繋がりを重視した環境づくりを

——法人の運営だけでなく、社会福祉団体の全国組織化や、精神科救急医療シ



●人間科学部 心理・行動科学科

水本 誠一 准教授 —— MIZUMOTO Seichi

「施設コンフリクト」という言葉を聞いたことがあるだろうか？これは、障がい者や高齢者のための社会福祉施設の新設計画が、近隣住民の反対運動によって中断・停滞する人権摩擦のこと。はづき福祉会、尼崎あすなろ福祉会、精神障害者社会復帰促進協会で理事長等を務める水本誠一先生は、身体・知的・精神障がい者と地域住民がお互いに理解し安心して暮らせる街づくりをめざし、施設コンフリクトをはじめとする様々な問題に取り組んできた。精神保健福祉士として、また教育者、地域活動家、音楽家の視点から、話を聞いた。



●誤解偏見を解消し、地域と共生する

——まず、精神保健福祉士の道に進んだきっかけを教えてください。

私は前職が公務員で、保健所と繋がりがありました。1990年、大阪市・福島区に、心に病をもつ人達のご家族らが「はづき作業所」を設立。六畳一間のアパートから始まり、徐々にメンバーも増えて移転することになったのですが、地域の反対に合い、職員も離職しました。その厳しい状況を目の当たりにし、スタッフとして中に入ろうと決めたのがきっかけです。結局、作業所は93年に移転が叶い、「はづき福祉会」として法人化し、私が代表を務めるに至りました。

——「ふれあいの里」でもコンフリクト問題に携わったそうですね。その経緯は？

94年、大阪市が精神障害者社会復帰施設当時として初の法定施設の計画を公表したところ、反対する署名が5000人以上も集まり、電柱約300本に絶対反対！のビラが貼られるという激しい反対運動が起きました。反対の主旨は「子ども達に悪影響」、「地価が下がる」など、地域住民に重大な影響を与えるというものです。2年に渡り行政が説明会を開催し、訪問説明も試みましたが、計画はとん挫。運営側から私にも手伝って欲しいと声が掛ったのです。

直接受理する電話相談ではありませんでした。24時間365日、関係者から直接相談を受けることのできる窓口を設けることになり、精神科病院の院長や看護師なども加わって、それぞれの専門的な視点から相談マニュアルを作成しました。その後、状況によって救急医療に結び付けることのできるトリージ機能が付加するために、その日、どこの病院に空きベッドがあるのか等がわかるようシステム化、これにより、必要な時に必要な医療を受けられる体制づくりの第一歩になりました。

——そうした様々な事案に取り組まれる中で、精神障がい者の捉えられ方をどのようにお考えですか？

世界的に見ると、精神障がい者を取り巻く日本の環境整備はかなり遅れています。少しずつ法律は整備されておき、障がい者は病者という位置づけから生活者として認識されてきてはいますが、今年7月の相模原殺傷事件のようなことが起こると、また状況が後退していくのではと危惧の念を抱くこともありますね。

私達一人ひとり、能力も価値観も違い、それを皆で補い認め合いながら生きています。そうした繋がりをどこかで見出しながら生活することが大切であり、そのために施設があるのです。私が10年以上前に相談に乗った人で、今でも3カ月に1度は必ず電話をしてくる人がいます。元気ですと。それだけのことで、その繋がりがあ

●水本誠一（みずもと・せいいち） 東海大学海洋学部 海洋科学科卒業。理学士（精神保健福祉士）。2008年より現職。大阪市精神保健福祉啓発事業企画提案者選定委員会委員。大阪府精神医療審査会委員。阪神子どもの虐待防止ネットワーク「ほっと」運営委員。社会福祉法人はづき福祉会 理事長。社会福祉法人尼崎あすなろ福祉会 理事長。社会福祉法人精神障害者社会復帰促進協会 評議員。共著に『ソーシャルワーカーの仕事（朱鷺書房）』など。社会活動として、国連防災会議（神戸）Welcome partyやのじき兵庫大会（全国障害者スポーツ大会）開・閉会式典、サグラダファミリア教会での演奏会等知的障がいのある人たちとの音楽活動（1982～）。



心に病気を抱える人もそうでない人も、
孤立してしまわない社会環境作りが必要なのです。



・バリエロナ・サグラダファミリア教会地下礼拝堂で演奏(2004年)



・「楽団あぶあぶあ&ミュージカルチームLOVE 東京公演Vol.2」
(すみだトリフォニーホール・2006年)



・「楽団あぶあぶあ&ミュージカルチームLOVE ニューヨークコンサート」
(ニューヨーク・トライベッカ パフォーミングアーツセンター・2006年)

とによって、彼は安心して生活していけるのかもしれない。心に病気を抱える人もそうでない人も、孤立してしまわない社会環境作りが必要なのです。

—— 学生には何を学んで欲しいですか？

自分の中にも偏見があると知ることから始めて欲しいですね。実習で精神科病院と障害福祉サービス事業所に行きますが、現場へ入った際の「気持ち」を尋ねると、口ごもったり、怖かったと言ったりします。「その時、何を感じたのか？」自分に正直になり、たくさんさんの感情があることを知ってからでないとい先へは進めません。精神保健福祉士という仕事は感情が入り過ぎてあつさりし過ぎて難しい。正直であることの大切さを知っている人は、そのバランスをうまく取ることができる気がします。そこへ導き、人間の在り方を一緒に考えていきたいと思っています。

●音楽を通して知的障がい者と交流

—— 先生は精神保健福祉士として活動される一方で、水本誠の名で音楽による社会活動もされています。拠点となる「楽団あぶあぶあ」に参加するきっかけとは？

「楽団あぶあぶあ」は1982年、神戸市に住むダウン症や自閉傾向の青年達5人が中心となり結成されました。姉が呼びかけ人として、最初の演奏会の手伝いに駆り出されたのが参加のきっかけです。10年間、手伝いを続ける中

児島まで、全国各地で上映会が開催され、延べ2万人以上の方が観に来てくたさいました。

—— 彼等の活動が多くの人々の感動や共感を呼ぶ理由は何だと思えますか？

人それぞれ、感じる場面は違うと思いますが、「与えられた通りではなく、自分達で作っている」という彼等の自負と出会いへの感謝の気持ちが、どこかに表れ、音楽としてメッセージを発しているのではないのでしょうか。

また、私を含め、スタッフが楽しんでいることも関係しているかもしれません。音楽を通して生まれた繋がりや、彼等との関わりが楽しい。皆が背伸びせずに接していることが、今に繋がっているのだと思います。

—— 今後の展望をお聞かせください。

楽団は最高齢者が50代中盤にさしかかり、体力面などからも、いつまで続けられるかというところです。誰が欠

で、メンバーの真摯な演奏に胸を打たれ、彼らが持つ技術をうまく導けるオリジナル曲を作ろうと思いつきました。当時、24時間テレビに何度か出演したこともあり加入希望者が多く、「それならミュージカルチームも作ろう」という代表の大胆な提案のもと、35人編成の「LOVE」を立ち上げました。こちらも私が楽曲を担当したので、ピアノ伴奏することになったんですよ笑。

—— 公演回数200回、観客数延べ15万人。海外公演や映画化など、その活動は躍進を続けていますね。

様々な場で演奏させてもらう中で「今が一番いい時期」と、代表がニューヨーク公演を提案し、各方面に声をかけて寄付を募りました。全て自前の開催であり、家族を含め1000人程で渡米するため、すぐにという訳にはいきませんでした。インターシップでニューヨーク・ジャージー州立ラマボ大学と交流をもち、様々な紹介を通して2000年にラマボ大学とトライベッカ・パフォーミングアーツセンターでの公演が実現しました。会場は満席、最後は総立ち。メンバーはケロッツとして笑っていましたよ(笑)。素晴らしい経験でした。

映画「あぶあぶあの奇跡」は、岡山で開催された障がい者の祭典で知り合った映画監督・船津一氏が、18年間に渡り撮影をし、2008年に完成しました。プレス発表会で兵庫県知事の井戸敏三氏が後援会長になろうと心強い声をあげてくださり、北海道から鹿



映画「あぶあぶあの奇跡」DVD。「あぶあぶあ」という名称は、代表のひがしのようこさんが子どもの頃「ぶあぶあ」と唄を歌っていたことから、メンバーと相談して付けられた。

けても難しいですが、お母さんたちも含めメンバーの人たちの強い希望で、可能な限りは続けていきます。例年、数百人の方が来場される定期演奏会は、今年で35回目を迎えます。大ホールでの開催は厳しくなるかもしれませんが、今後はより楽しみながら、自分達でライブハウスなどを借り、食事でもしながら楽なスタイルで開催できるよう、方向性を変えて続けていければと考えています。

楽団あぶあぶあ

1982年4月、神戸市に住むダウン症や自閉傾向の青年達が中心になって結成。養護学校卒業後の人生の楽しみにと、初給料で楽器を購入し、本格的な演奏を目指して稽古を始める。メンバーは全員就労しており、クリーニング工場や洋菓子工場、公共施設の清掃業務に従事。主な演奏者は知的障がいをもつ5人で、障害をもたない5人の仲間も加入している。演奏楽器はマリンバ、ピアノ、アコーディオン、キーボード、ドラム、パーカッションなど。楽団の構成は、演奏者と年間10回程度の各地でのコンサート活動を支える音響、照明、舞台スタッフ10人。そのほか会場設営など必要に応じて手伝う友人達は50人を超える。



・「楽団あぶあぶあ&ミュージカルチームLOVE 東京公演Vol.2」(2006年)